第４学年１組　総合的な学習の時間指導案

日　時　７月２日（水）11：15～12:00
場　所　生活科室
授業者　菅野　博信

１　単元名　パラスポーツでつながる　笑顔の輪！

２　単元の目標

パラスポーツを体験して楽しさを実感したり、パラスポーツに取り組んでいる人と関わりパラスポーツ大会を開いたりする活動を通して、障がいの有無にかかわらず誰もが楽しめるパラスポーツのよさに気付くとともに、相手を理解して助け合う大切さについて考え、多様な人たちとよりよく関わっていくことができる。

３　指導にあたって

（１）児童について

第3学年では、ユニバーサルデザインを題材として、身の回りにある「やさしさ」やその大切さについて学習してきた。ユニバーサルデザインは、年齢や性別、障がいの有無に関わらず全ての人のことを考えてつくられており、普段目にする道具や街中の様々な場所にもさりげなく取り入れられていることを理解している。それらを「やさしさ」として捉え、身の回りのものだけでなく人の言動にも様々な「やさしさ」があり、その大切さを学んできた。また、本学級の児童は体を動かすことが好きな児童が多い。休み時間もほとんどの児童が外で体を動かして遊んでいる。しかし、外遊びの中で、相手の立場を考えずに自身の思いを伝えてしまい、言い争いになることもある。相手の状況や思いを理解して一緒に活動したり遊んだりすることが苦手な児童もいる。児童の好きなスポーツを通して、相手を理解して助け合う大切さを、自分事として学んでいくことができるようにしたい。

（２）教材について

パラスポーツは、障がいのある方も楽しめるように道具やルールが工夫されている。障がいの有無に関わらず誰もが楽しむことができ、それぞれの夢や目標に向かって熱中できるよさがある。パラスポーツを通して障がいのある方と関わり、一緒に楽しむ中で、障がいの大変さを感じるとともに、障がいがあっても、自身の記録向上や目標を目指して努力する姿に、健常者と変わらぬ向上心やそれ以上のものを感じることができる。その姿は児童にとって憧れやかっこよさを感じる瞬間であり、障がいのある方に対して、健常者からの「かわいそう」という見方を変えることができると考える。パラスポーツを通して、障がいのある方との出会いや結び付きが生まれ、障がいの有無に関係なく共に楽しむ中で、自分たちの得意なことや不得意なことを補い合って生きていく大切さや、相手の思いや状況を理解し、助け合う福祉の大切さを学ぶことができる教材であるといえる。

（３）指導について

第一小単元では、パラスポーツのボッチャと出会い、何度も経験する中で、ボッチャの楽しさを十分に味わうことができるようにしたい。その上で、「ボッチャが、障がいのある方にとって楽しめるスポーツになっているのか」という問いを基に、「自分たちにとって楽しいボッチャ」という見方から、「障がいのある方にとってのボッチャ」へと考える視点が変化するようにしたい。第二小単元では、障がいのある方はボッチャ競技をどのように行っているのかを調べたり、疑似体験したりする活動を取り入れながら、実際にボッチャ愛好会の方と関わる場を設定する。この段階において、児童は障がいのある方に対してまだ「かわいそう」と思っていることが予想される。福島市スポーツ振興課のボッチャ交流事業を活用したり、ボッチャ愛好会の方と一緒にプレーしたりする活動を通して、「すごい」という憧れの視点へと変換できるようにしたい。障がいのある方とボッチャを通して関わり、一緒に楽しむことを通して、その方の生き方についても学ぶことができると考える。第三小単元では、パラスポーツを通して自分たちにできることを考えていく。パラスポーツ大会を開くためにルールや場の設定等を工夫し、みんなが楽しむことができるように試行錯誤を繰り返していく中で、相手のことを考え、理解し、助け合う大切さについて考え、実践できるようにしたい。

４　単元の計画（単元構想）（総時数７０時間）

（１）単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	パラスポーツを探究する中で、その特徴や魅力を理解したり、調査活動を目的や対象に応じて実施したりしている。	パラスポーツについての多様な情報を比較したり関連付けたりしながら整理・分析し、パラスポーツや障がいのある方への思いや考えを、相手や目的に応じて表現している。	他者と協力しながら探究活動に取り組み、パラスポーツへの魅力を感じ、自分にできることを考えて実行している。
小単元の評価規準	①　パラスポーツの楽しさやよさに気付くとともに、様々な人が助け合って生活していることを理解している。 ②　障がいがある方の、パラスポーツへの思いや競技の仕方についての調査活動を、目的や対象に応じて適切に実施している。 ③　相手を理解し、助け合う福祉の大切さへの気付きとそれを実現しようとする思いの高まりは、パラスポーツと障害のある方の関りを探究的に学んだことの成果であることに気付いている。	①　パラスポーツの体験を通して課題を見つけ、解決の方法や手段などの見通しをもつことができている。 ②　課題の解決に必要な情報を収集する手段を選択し、整理して蓄積している。 ③　課題解決に向けて、友達と多面的・多角的に考えながら情報を整理している。 ④　パラスポーツによる交流活動を通して見えてきた、パラスポーツのよさや相手を理解し助け合う大切さについて、伝える相手や目的に応じて表現することができる。	①「障がいの有無に関係なく誰もが楽しめるパラスポーツにしたい」という願いの実現に向けて、自ら見いだした問を粘り強く追究しようとしている。 ②　自分と異なる意見や考えを生かしながら、協働的に探究活動に取り組んでいる。 ③　パラスポーツのよさや楽しさを伝えるために、自分にできることを見つけ、取り組もうとしている。

（２）指導と評価の計画

小単元名（時数）	学習活動（時間）	知	思	態
ボッチャを体験しよう！(15)	・11月に見学する予定のデフリンピック大会について調べる。（2） ・パラリンピックについて調べる。（2） ・ボッチャについて調べる。（2） ・ボッチャを体験する。（6） ・ボッチャについて調べたり体験したりして、分かったことや思ったことを話し合う。（3）	①	① ①	
ボッチャで一緒に楽しもう！(25)	・障がいのある方になりきってボッチャを行う。（2） ・障がいのある方になりきってボッチャを行い、気付いたことや思ったことを話し合う。（2） ・障がいのある方のボッチャ競技の様子を調べる。（2） ・障がいのある方ボッチャ競技の様子を調べたり疑似体験をしたりして、気付いたことや思ったことを話し合い、まとめる。（3）	② ②	② ③ ③	

	・「福島ボッチャ愛好会」の方とボッチャで交流する。（本時1／2）	（2）	②		
	・交流して気付いたことや思ったことを整理して、まとめる。	（4）		③	①
	・パリパラリンピック銅メダルの遠藤裕美選手とボッチャで交流する計画を立て、準備する。	（3）			
	・遠藤裕美選手とボッチャで交流する。	（2）	②		
	・遠藤裕美選手と交流して気付いたことや思ったことを整理し、まとめる。	（5）		③	
パラスポーツ大会を開こう！（30）	・障がいの有無に関わらず楽しめるボッチャで、自分たちに何ができるかを考え、計画を立てる。	（3）		①	②
	・ボッチャ大会を開くことを決める。	（2）			
	・三小生や保護者にボッチャを知っているか、やったことがあるか等のアンケートをとる。	（3）		②	
	・アンケート結果をまとめて分析する。	（4）		③	
	・ボッチャ大会を開くための計画を立て、準備をする。	（10）			③
	・ボッチャ大会を開き、三小生や保護者にボッチャの楽しさやよさを伝える。	（2）		④	③
	・ボッチャ大会を振り返る。	（2）			
	・障がいの有無に関わらず楽しめるボッチャのよさ、共に生きることについて、学んだことを振り返る。	（2）	③		
	・1年間の学びを振り返り、自分の成長を捉える。	（2）	③		

5　本時の計画

（1）本時のねらい

子どもの「障がいのある方はボッチャをどのように行っているのか」という疑問をもとに、ゲストティーチャーの方が実際にボールを投げる様子を見ることを通して、「一緒にボッチャを楽しみたい」という思いをもつことができるようにする。

（2）本時の終末に予想される子どものつぶやきと本時の手立て

【予想されるつぶやき】
障がいがある方のプレーは上手ですごい。一緒にボッチャをしたい。

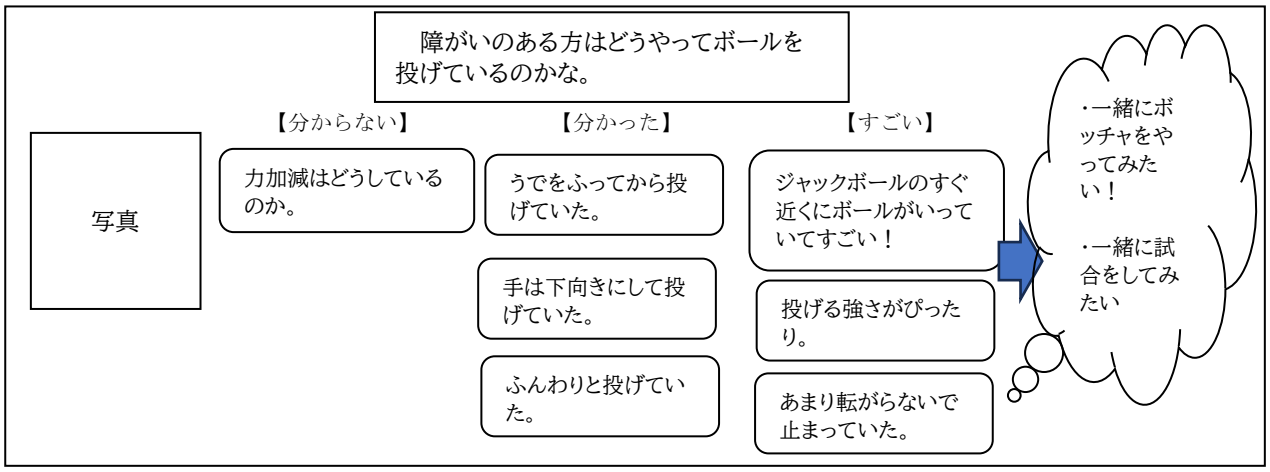
子どもを本気にさせるゆさぶり

投げる動作を見て、子どもたちからは「すごい」という思いや「～が分かった」「～がまだ分からない」などの思いが出てくることが予想される。教師は、子どもの思いについて理由を問い返したり、疑問に思っていたことを解決できたのかどうかを問いかけたりすることで、投げる動作から具体的に考えたり、説明を聞く必要感を引き出したりすることができるようにする。

子どもの内面の可視化

本時の学習で感じたこと振り返り、記述する時間を設ける。子どもが感じたことを分類しながら共有し、共有した内容から今後の活動について考えていくことで、障がいのある方との活動へ思いを高めることができるようにする。

（３）指導過程（第２次　１０／２５時間）

学習活動・内容	時間・形態	○指導上の留意点　◆本時の重点　※評価
1　前時までの学習を振り返る。 ・　ボールをどのように投げているのか（投げ方・体の使い方・力加減）が分からなかった。 ・　コミュニケーションの取り方が分からなかった	5 （一斉）	○　前時までに調べた、「障がいのある方がどのようにボッチャ競技を行っているのか」について、分からなかったことを確認するとともに、どうすればよいかを問いかけることで、「実際に見てみたい」「選手に来てもらいたい」という思いを引き出すことができるようにする。
2　学習活動の見通しを確認する。 障がいのある方は、どうやってボールを投げているのかな。	3 （一斉）	○　本時では、ゲストティーチャーとして、県障がい者スポーツ協会の方に来ていただいていることを伝え、実際に投げる様子を見ながら疑問を考えていくことを確認し、課題につなげる。
3　障がいのある方の投げる様子を実際に見る。 （すごい） ・　ジャックボールのすぐ近くにボールが止まっていてすごい。 ・　投げる強さがぴったり。 ・　あまり転がらないで止まる。 （分かった） ・　腕をふってから投げているのが分かった。 ・　手は下向きにして投げていた。 （分からない） ・　一瞬でよく分からなかったからもう１回投げてほしい。 ・　力加減はいても分からないから聞いてみたい。	22 （一斉）	○　投げる動作を見る子どもたちの視点を明確にすることで、目的をもって見ることができるようにする。 ○　ゲストティーチャーの方には、まずは説明をせずに投げていただくことで、投げる動作をよく見て考えることができるようにする。 ◆　投げる動作を見て、子どもたちからは「すごい」という思いや「～が分かった」「～がまだ分からない」などの思いが出てくることが予想される。教師は、子どもの思いについて理由を問い返したり、疑問に思っていたことを解決できたのかどうかを問いかけたりすることで、投げる動作から具体的に考えたり、説明を聞く必要感を引き出したりすることができるようにする。 ※　障がいのある方と一緒にボッチャで楽しみたいという思いをもつことができている。
4　本時の学習を振り返る。 ・　また障がいのある方と一緒にボッチャをやってみたい。 ・　一緒に試合をしてみたい。	15 （一斉）	◆　本時の学習で感じたこと記述する時間を設ける。子どもの内面を可視化し、分類しながら共有することで、今後の障がいのある方との活動へ思いを高めることができるようにする。

（４）板書計画